

---

# 失われた少女

早海徒雪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

失われた少女

### 【Nコード】

N4954Z

### 【作者名】

早海徒雪

### 【あらすじ】

時は先の大戦のさなか。小さな山間の村に母親と暮らす少年は、飢えと貧しさの中で、夢も希望も生きる張合いも見いだせないまま、細々と生きていた。ところがある日、そんな彼の元に思いもよらぬ出来事が起こった。彼は古いお堂の裏で、体の光る不思議な眠れる美少女と遭遇したのだ……。

朝だ。少年は目を覚ましたまま、しばらくまんじりと天井を眺めている。天井は汚れ、まだらの文様を形成している。彼はずっと前から、その文様に意味づけしたり似た形を探ったりもしているのだが、所詮しみはしみであり、なによりそれらを遊ばせうるだけの想像力を、彼は持ち合わせていない。それでも少年はこのところ毎朝、寝起きに天井を見つめるのが習慣となっていた。

突然、彼は咳きこむ。体を丸め、ケンケンとひどい咳を繰り返す。少年はふとんからはい出ると、ふらつきながら倒れこむように部屋を出て、草履をつっかけ土間へと降りて行く。土間の隅、大きな水瓶の影に隠れて、ひとしきり咳を続ける。地面に吐き出された痰には、血の混じっているものもある。少年はそれに気づいて、草履の上から踏みつけ荒々しくかき消した。

あらかた落ち着いてから振り返れば、いつの間にか母親が後に立っている。やせ細り落ち窪んだ目で、こちらを見つめている。この家には、少年と母の二人きりしか住んでいない。父親は彼が幼い頃に亡くなり、年の離れた兄がひとりいたが、こちらは戦争へ行つて久しく便りもない。生活は常に苦しく、少年が学校に行っている間、母は近くの畑を耕しているのだが、猫の額ほどの土地は痩せ、とれる食物もほんのわずかだ。愛想もなく、いつしか陰気な雰囲気を出すようになっていた母は、村人からひどく嫌われていた。だがこのご時勢では、他人や共同体からの協力がなければ生きていくことはできない。

彼にはわかっている。母親は彼の体の心配しているのではない。例えば彼に病の気があったとしても、ここには治療を受けるだけの金も余裕もなく、しかもそれがもし結核だとあつては、これまで以上に村からつまはじきにされ、最悪その縁すらも断たれてしまうかもしれないのだ。世間は弱者に常に冷たい。つまり彼女は巡り巡って

この家の、なにより自分のことの心配をしているに過ぎないのだ。

少年は何でもないと言うように乾いた笑いを浮かべる。不器用なため、こうしてうわべだけ気持ち装うことはどうも苦手だ。そんな彼の心情を理解しているのかいないのか、母親はもっさりと踵を返して部屋の中へと消えて行つた。少年は水釜の底にわずかに残された水をひしゃくですくつて、軽くうがいをして口元を湿らせる。悲しさも空しさもやりきれなさも、あわせて胸の奥底へとしまい込む。

寝間に帰つて着替えをした。ふとんをたたんでから囲炉裏の側に戻つてみると、既に朝食の膳が揃えられている。膳といつても、何が入っているかわからない粥のような汁のような物が、冷めた小さな器にもられているだけだ。それでも少年はそこに正座し、手を合わせ小さく感謝の題目を唱えると、ささとそれをすすった。食事は二三口程度ですぐに無くなり、当然腹が満たされることもない。

朝食を終えた少年は、母への挨拶もそこそこに学校へと向かう。学校は山を下り川を越え、小一時間ほど歩いた村のはずれにある。学校では、もはやこの頃は授業もなく、校舎や体育館はみな工場へと様変わりをしていた。少年をはじめとする生徒たちは皆、そのまま作業者としてかりだされ、一日ずっと働かされている。仕事は単純で、ベルトコンベアで流れてくる部品を取り、溶接し、また隣の別のコンベアに並べ直すということの繰り返し。その部品が一体何の部品で、どこに使われているのかはまったく知らされていない。そのせいか、少年は自分の作業に何の意味も見出せないでいた。それでも休憩をはさんだ数時間、ただひたすらに作業に没頭する。彼の日常はそんな風だった。

下校の時刻がおとずれた。少年は荷物をまとめ一人で帰宅の途につく。弁当を用意することができないので、学校では水しか飲んでおらず空腹だった。ふらふらになりながらあぜ道を進んでいくと、目の前に庄屋の息子とその取り巻きたちが立ちふさがった。ニヤニヤ笑いながら、彼を見下ろしている。少年は下を向いたまま歩いて

いたので、間際になるまで彼らの存在に気づかず、慌てて踵を返そうとしたがもう遅い。取り巻きが彼を捕まえて、庄屋の息子の面前に引きずりだした。

この息子の父親はこの辺一体をとりしきる大地主でもある。息子は三人おり、上の二人はそれぞれ召集されてこの村にはいない。また、この三番目も口では兵隊を志願し、実際学徒として戦地へ行ってもおかしくない年齢なのだが、なぜかいまだにこの村に留まっている。噂では後継ぎがみな取られてしまうことを恐れた父親が、裏から手を回し、中でも一番気に入っている末の息子を手元に置いているのだという。しかも工場や畑で働くこともせずに、毎日ブラブラしているだけだ。こうして幼いころから甘やかされて育てられたこのどら息子、村では彼よりも年長の若者がいないせいもあって、すっかりこの辺の子供たちの又シのような存在となっていた。

少年が目をつけられ、格好の標的となってしまうたのは、いついかなる時からであったか、もはやどちらの記憶にもない。彼が登下校の際、この庄屋の家の前を通らざるを得ないことが、理由の一つであるのかもしれない。だがそこは村を出入りするにはどうしても通らなければならぬ道であり、迂回するには奥山へ道なき道を深く分け入らなければならぬ。少年は時にはこっそり走ってこの場を通り過ぎることもあるのだが、今日のように行く先で待ち伏せされていてはどうしようもなかった。

半刻ほど後、少年は薄暗くなりかけた山道を歩いている。服には泥がついており、心なしか右の足を引きずっている様子だ。今日はあのどら息子は相撲をとると言い出し、嫌がる少年を捕まえて、ちぎっては投げちぎっては投げを繰り返した。体格の上ではもはや大人と子供ほどの差がある。さらにあの家では米の飯をたらふく食っているという噂まであった。そこまで恵まれているのなら、なぜ自分のような者をいたぶらねばならぬのか。彼は涙をこらえながら考える。しかし小ねずみをなぶり殺す山猫の気持ちなど、当のねずみ自身に理解できるわけもなかった。

とにかく早く家にたどり着きたい。痛みと寒さと屈辱に耐えながら、そのことだけを考えて少年が山道を上っていくと、斜め前方にあるお堂の辺りが、ぼうつと光を発しているのに気がついた。ゆっくりゆっくりと呼吸をするかのように、ゆるやかな瞬きを繰り返していた。少年は驚いて恐怖にかられたけれども、それ以上に好奇心が勝った。彼は歩を進め、おそろおそろその光の方へ近づいていった。

参る人も久しく絶えた小さな古いお堂である。中には小さく汚れた地蔵が鎮座しているだけだ。光はその裏から漏れていた。回ってみると、奇妙で見たこともないものが、そこに転がっていた。

それは半透明の細長いカプセルで、中心部には刀のつばのような厚みのある丸い枠がはまっている。その枠の周りには、小さな豆電球がぐるりと取り囲んでいて、少年がみた光の源は、どうやらその電球のようであった。かすかな淡い光を、一定の間隔で点滅させている。大きさは少年の背丈ぐらいか。さらにその頭頂部が大きくひび割れて欠けており、中からかすかな煙も立ち昇っていた。周囲にはそのガラスの破片が点在しているに加えて、小柄の人間がひとりうつ伏せに倒れていた。

事故　なのだろうか。少年の知識と経験からでは、それが何か、これが何の組み合わせなのかを、すべて把握することは困難であった。ただそれでも、どうやら丸いカプセルは乗り物のようなものであり、事故かなにかの拍子にそれが墜落し、乗組員がその際に外に投げ出されてしまった、と言う話を何とか組み立てることができた。それから少年は遠巻きにその物体を眺めながら、倒れている人間の方へ駆けよった。

それは彼よりもひとまわり小さい体つきで、衣服は何も身に着けておらず裸のままである。体が上下しているのは呼吸をしているからか。全身に目立った体毛は見受けられず、頭にも髪が生えていなかった。少年はそっと人差し指でその尻の辺りを軽くつついてみた。その肌は弾力があり、かすかな体温も感じられる。彼はしばらく考

えた末、意を決してそれを仰向けにしてみた。

少年はその顔を見て息を呑む。鬼か化け物のようなものを想像していたわけではないが、彼の目に映ったのはなんとも美しい少女の姿であった。彼はこれまで、こんなに清楚な女性を見たことがない。面長だがふつくと丸みをおびた穏やかな顔立ち。両の目は閉じられて、静かに眠りにについている。少年は神々しい菩薩像を連想した。フツと急にあたりが暗くなる。あのカプセルが発していた光が途絶えたためだ。ところがしばらくすると、今度は眠る少女の体が、ぼうつとかすかに光り始めた。それまでの光を、その体で蓄光していたかのようなだった。少年はますますその少女が神聖なる存在と見えるようになり、手をあわせ深く頭をたれた。

少年はこの少女を自分のもの、自分だけのものにしたくなった。うやうやしく少女の体を抱きかかえる。辺りを見渡し、人の姿が見えないことを確認すると、その場から足早に離れていった。誰にも見られぬように、わざとせまい裏道を選びながら、急いで彼女を運んでいった。

なんとか無事に我が家のすぐ前までたどり着く。しかし、彼はこの光る少女を中へ入れることは躊躇した。そこでぐるりと裏へ回り、さらに裏山へのゆるやかな坂を登っていくのだった。

人気のない小さな農家へとやって来る。ここは不幸な事情があった。一家離散してしまい、今では誰も住んではない。少年は時々ここに忍び込むことを、密かな楽しみとしていた。彼はその馬小屋へと向い、その板塀にあいている大きな穴から、中へと入っていた。そこには当然家畜は残されておらず、奥の方に積み上げられたわらがあるだけだ。少年はそこへ少女を運び、そのわらを整えて簡単な寝屋をしつらえると、彼女をそこへ寝かせた。わらでその体を覆うようにして、顔だけを出す。まだ淡く全身は光っていたが、わらに隠れて大分目立たなくなった。作業を終えた少年は膝を抱えてその場に座り、しばらく眠る少女を眺めていた。

少年が家に戻ったのはさらに一刻ほどもたつてからである。こっ

そりと裏口から入っていったのだが、母親にすぐに見つかってしまった。だがまた彼女は何も言わず、ただ夕食の膳を顎でしゃくっただけである。少年は母親の無関心ぶりに、この度ばかりは感謝した。少年はすぐに膳に向かい、しばらく食べる振りをして、母が奥の間へ引っ込んだことを確かめると、小さな巾着袋を懷から取り出した。お椀の中身を、半分ほどその中にそいでまた隠す。それから残りをすばやく平らげると、食後の挨拶もそこそこに、寢間へ引き上げふとんの中に入ってしまった。

真夜中。少年はそつとふとんから這い出す。側に眠る母親を起こさぬよう細心の注意を払いながら、裏口から外へ抜け出る。月明かりの下、行く先は当然あの馬小屋である。中に入ると、少女はわらの上に運んだときそのままに眠っていた。少年は一緒に持ち出した小さな椀の中に袋の中の粥をそそぎ、次に彼女の上半身を起こしてその器を口元へ持つていつて傾けた。すると少女は口だけを動かしてすすりはじめるではないか。あつという間に持ち込んだ食料はなくなってしまった。

食事の世話が終わり、少年はまた少女を横にして、ずっとその寝顔を見つめている。少女は赤子のようにひたすら眠っている。まだほんのりと光も発していた。少年はそつとその丸い頬に触れてみた。それはとてもやわらかで暖かく、彼の固まり凍ってしまった心根までも、まるで溶かしてくれるかのようであった。

それから少年は毎日少女の世話を続けている。朝晩に自らの食事の一部を残し、彼女に食べさせた。少女はいつもすぐにそれを平らげてしまい、食べる以外はずっと眠り続けるだけだ。体の光はいつしか消えてしまっていて、少年は夜はろうそくを手馬小屋を訪れるようになっていた。彼女が目覚めず、また光も灯さなくなったのは、食事の量があまりにも粗末でありにも少ないからだ。そう思った彼はもつと少女に食べさせてあげたくて、自分が食べる量をどんどん減らしていった。

ある日、少年はついに倒れてしまう。後で話を聞いた限りでは、



工場での作業中に突然、足元からその場に崩れおちてしまったのだという。目を覚ましたのは、夕刻になってからだ。工場の現場監督もつとめる老教師が心配そうに側についていたが、少年はもう大丈夫だと説明してあわてて下校した。だが実際は「大丈夫」など、少年のまわりには何一つ存在していなかったのだ。

少年はまたとぼとぼと帰宅路を歩いている。一昨晚からとうとう自分に与えられた粥は、すべてあの少女に分け与えている。水だけではとうてい持ちそうにない。山の中で何か食べ物でも探してみるか。しかしそこで食料を見つけ確保する術も知識も時間も、少年は身につけてはいない。母親に正直にあの少女のことを話して食事を別に分け与えてもらおうか。しかし他人に施しを与えるほどの余裕も金も善意も、我が家だけでなくどの家にも残されてなどいない。悪くすれば見殺し、良くてどこか遠くへ連れていかれてしまうだろう。なんとかならぬものだろうか。そんな風に少年があれこれいふような考えを思い巡らせながら歩いていると、今日もあのどら息子の一団が、彼の前に立ちふさがった。

いつも以上に彼らに付き合っている暇などない。何とかその場から逃げ出そうとする半面、少年の頭の中にある暗い囁きがもたらされた。まさかいやひよつとして真剣に情けがあるなら思い切つてどんなことでも我慢すれば頼んでみようかどうかでしょうか。そして次の瞬間に、少年はその前に土下座していた。

少年の頼みは簡潔だった。食料を少し分けてほしい。その代わりに何でもするし何でも言うことを聞く。地べたに頭を強く押し付け、心の底からひたすらに乞うた。その突然の陳情に対し、どら息子たちは一様に呆けた顔をしていたが、ややあつてゲラゲラと笑い出した。だがそんな蔑みの態度をとられても、少年は懇願の姿勢を決して崩さなかった。

もしこの時彼が、理知的な感性もしくは野性的な勘やひらめきを有していたなら。いや、なにより頼み込む相手相談する相手を、十二分に検討していた上で選んでいたなら。このどら息子が常に心の

中で育んでいる悪しき考えが、さらに鎌首を持ち上げはじめたことに気がつくことができたかもしれない。あるいはそれ以前に、この状況を克服するだけの新たな可能性を見出すことができたかもしれない。しかし、残念ながら現実はそうではなかった。

どら息子はすぐさま唇をねじ曲げ、取り巻きたちに合図した。まわりもそれに同調した上、頷いた。少年は土下座をしているので、そのやりとりをうかがい知ることはできない。やがて彼は取り巻きたちに神輿のように担ぎ上げられてしまっていた。「わっしょい」「わっしょい」と景氣のよい不気味な掛け声と共に、庄屋の屋敷の方へ運ばれていくのだった。

運ばれた先は、裏口から入ってやや奥行った場所にある離れである。そこは元は物置がわりに使っていたのを、彼らが遊び場としてたむろう場所にしたところだ。母屋からかなり距離もあるので、少々の騒ぎを起こしても、気づかれない利点があった。そしてそれは、少年にとっては不幸の源ともなる。取り巻きの一人が、畳の上にかび臭い敷布団をひいた。少年はその上に投げ出され、うつぶせのまま両肩と頭を抑え込まれた上、その口には猿ぐつわがきつくかまされた。誰かが少年のズボンのベルトを外した。彼の必死の抵抗もまったく効果なく下半身が露になる。すべてのお膳立てが整ったところで、どら息子が背後に立った。少年の尻の辺りに唾を吐き、それからねっとりとなぶった。とうとう彼は自分が何をされるのかを理解した。しかしすべては遅く、どら息子は自らズボンと下着を下ろすと、屹立した男性自身を、少年の尻に突き立てた。

庄屋の息子は別に男色家というわけではない。ただ彼は常に性欲をもてあまし、以前から村の娘という娘に数々乱暴を働いて、色々と問題を起こしていた。ところがこの時勢で、三駅ほど離れた町にある紡績工場が人手不足となり、若い娘がほとんど全員そこへ引張られてしまったのである。住み込みのため夜になっても村には戻ってこない。そこで彼が思いついたのが、このたびの行為であった。かつての名立たる武将には、必ず男の愛妾がいたからだというのが

その理由だった。だがそれは強者の馬鹿げた理屈、身勝手な投影にすぎないのであって、弱者たる少年にかすかに残された自尊心は、徹底的に踏みじられもろくも散らされてしまったのであった。

すっかり暗くなつてから、少年は開放された。裏口から外に出され、足元には姦淫の駄賃というのだろうか、やせ細った小さいものが数個転がっている。少年はのろのろとそれらを拾つて鞆に押し込めた。腰のあたりにずんとした重みを感じながらそろそろと歩く。気持ちは急いていたが、体は痛みで思うように動かなかつた。そして少年は、そのまままっすぐ少女のいる馬小屋へと向かった。彼は眠る少女を目の前にして、はじめて泣いた。彼女に取りすがつて泣いた。ひたすら泣き続けた。

さらにその日の真夜中。少年はまた家を出る。だが今回は少女の元へ戻る前に、まずは裏山をうろつくと歩き回った。細い薪をいくつか拾つてから、くだんの農家の母屋へ入つて、台所から煤けた鍋とそれを支えるための五徳を持ち出した。馬小屋にて簡単な調理場をこしらえて、五徳の下にわらと薪を並べてから火をつける。水を入れた鍋をその上に置き、その中に肥後の守でいもを細かく切り刻んで入れた。自宅からこつそり持ち込んだわずかな塩と味噌を、適当に混ぜて煮立たせる。次第にいい匂いがしてきた。腹が鳴り喉が鳴つたが、彼はすぐに少女に食べさせようと、器に手製の芋から汁を盛ると、彼女を起こしてその口へと運んだ。

少女は食べなかった。

熱すぎたのかもしれないと思い、何度も息を吹きかけ冷ましてみても駄目だった。確かに少年はこれまで料理の経験は無いに等しかったが、味見をしてみると格別悪い出来ではないように思えた。たいた調味料も加えずにただ、いもを煮ただけの出汁である。しかもいつも少女に与えている粥と、どれほどの違いがあるというのだろう。極上の一品とまではいなくても、決して彼女が口にしよう

としない理由がわからない。

少年はだんだん腹が立つてくる。自分があれほどの屈辱に耐えて、手に入れた食料である。感謝しろとまでは言わないが、せめて素直に口にしてしかるべきではないのか。しかもこの時勢では、食物を粗末になどできないはずだ。少年は無理にでも口を開けて、そのいも汁を注ぎ込むということまでしたが、少女はすぐに吐き出してしまうのであった。

なぜだ。なぜ食べない。なぜ食べようとしな。きちんと調理した品でなければ、口に合わないとも言うのか。自分が作った物など、食べるに値しないとでも言うつもりなのか。食べる。食べる。食べる食べる食べる。

少年は少女の両肩をもって激しく揺り動かす。彼女はそれでも目を覚ますどころか何の反応も見せず、力なく首を前後に揺らすだけである。意識なく正体もなき者に無理強いしようとしても詮無きことだ。彼は手を離して深くうなだれた。少女はそのまま仰向けに倒れ、その拍子にまわりのわらが大きく跳ねた。

少年が顔を上げ眠る少女を見ると、わらが跳ねたせいで先ほどよりもかなり肌が露になっている。そんな彼女の体を見ているうちに、彼は心の中に理性ではどうすることもできない、黒い塊が大きくなっていくのを感じていた。自分は己と引き換えに、食料を手に入れた。心や体を汚してまで、少女に尽くした。では彼女はこれまで、自分に何をしたか。なにを返してくれたというのか。毎日世話しても何の反応もない。体の光も消え神々しさも消えた。奇跡や功德すらも起こらない。そればかりか、今日はわざわざ手に入れた食料を無駄にした。あまりにも勝手、あまりにも傲慢ではないか。まともな食事にありつきたいのであれば、何かしらの代償を用意するべきだ。……今日の自分のように。

少年は少女に被さっているわらを丁寧のひとつひとつはらい、自身の手ぬぐいでその体を丹念に拭いていく。少女の一系まとわぬ姿が、さらに艶やかに浮かび上がった。彼はそれを見て息を飲む。そ

れから自分もゆっくりと服を脱いでいき、裸になった。小屋には冷たいすきま風が吹き込んでいたが、彼の体は芯から火照っていた。自分が今から行おうとしている行為の意義を、彼はどこまで理解できていたろうか。少年は眠る少女の正面に回った。そしてそおつと相手の体に肌をあわせ、上から覆い被さるうとしたその瞬間、

少女が眼を開いた。

少年は声にならない悲鳴をあげて、尻餅をついたまま後ずさる。さらに少女はむっくりと上半身を起こ上がりさせ、首を大きく回して、彼の方へ顔を向けた。その目は少年と同じく黒い瞳をしていたが、猫のように妖しく光っていた。彼の姿を捕らえたまま、小さく瞬きを繰り返すと、今度は少年に話し掛けようとするかの如く、口を大きく開いた。

突如、少年は少女へと飛びかかる。上から馬乗りとなってその細い首をつかむと、己の手にぐつと力を込めた。瞼を固く閉じ、口では「南無阿弥陀仏」を一心不乱に唱えながら。しばらくずっと、ずっとずっと少女の首を締め続けた。

少年がはつと気がついた時、少女の目はもはや開いてはいない。そればかりか呼吸も途絶え、まったく動かなくなっていた。少年は慌てて大きく彼女の体を揺すり、胸や足をさすってみたが無駄であった。少女は既に事切れていた。誰でもない、彼が殺したのだ。

逃げる。少年はその場から逃げ出そうとした。慌てて脱ぎ捨てた衣服や、調理に使った器具などを拾い集め、大急ぎで駆け出した。そして家に逃げ帰るやいなや、自分のふとんの中に飛び込んだ。母親が驚き起きて、なにやら声をかけたが無視した。彼はふとんの中で頭を抱えて丸くなり、小刻みにずっと震え続けた。

それからさらに半刻か一刻ほど過ぎた後である。あたりが急に騒がしくなった。いつの間にか寝入ってしまった少年が起きてみると、サイレンと半鐘の音が聞こえてきた。「空襲警報」「空襲警

報」。スピーカーのノイズと共に誰かが叫んでいる。最近ではこんな田舎まで、もはや敵が襲ってくることはないだろうと、多くの村人たちはすっかり高をくくっていた。少年や母もその噂を信じ込んでいたので、この騒ぎには大いに驚き慌てた。すぐさま近くの防空壕へ避難すべく、着の身着のまま表へ飛び出す。

ところが外へ出た少年は、突如まったく逆の方角へと駆け出す。

行く先はあの少女の元、彼女がいる馬小屋である。少女は本当に死んでしまったのか。彼はまだ信じられなかった。もし、もしまだ生きていたのなら。もし息を吹きかえしてくれたなら。今度こそ母親にすべてを話し、我が家で世話をさせてもらおう。今度こそ自分はどんなことでもやるし、どんなことにも耐えてみせる。今度こそちゃんとした食事も与えてあげる。だからだから。もう一度。もう一度だけ。やり直す機会をもらえないだろうか。だから、お願い……。

だが。もう少しでたどり着けるといったところで、空から一陣の光が落ちてきた。巨大な爆発と共に馬小屋は燃え上がり、少年はその爆風で跳ね飛ばされた。あまりにも強くあまりにも早く炎が一带に燃え広がったので、彼が体勢を立て直しても、もはや近寄ることすらできなくなっていた。中にいるはずの少女も、激しい紅蓮の炎の中である。少年は呆然とその場にたたずんだ。先ほどの喧騒が、ますます近づきますますます大きくなっていったが、もはや彼の耳には何も入ってはいなかった。

翌日。村のあちらこちらで、ゆうべの空襲騒ぎが話題である。奇妙なことに、昨夜敵の飛行機の姿を見た者は誰もおらず、それどころかそれらしい被害を受けたのも、あの少女がいた馬小屋を含めたその敷地内だけであつたらしい。誰が最初にサイレンや半鐘を鳴らし、誰が騒いで回ったのかもわからずじまいだった。結局警報も火事も、頭のおかしい浮浪者が引き起こしたものであるというだけでけりがついた。少年は改めて馬小屋を訪れてみたが、すっかり焼き尽くされて少女の骨はおろか何一つ残されてはいない。さらに、初めて少女を見つけたあのお堂へも行ってみたが、カプセルは消えてなくな

っていた。

少年の暗い日常が戻る。腹を空かせ、酷使される毎日。胸の病も刻々と進行している。さらに悪いことに、例の行為に味を占めたら息子に、少年は定期的になぶりものにされるようになっていた。もう彼には何も無い。何も残されてはいない。彼をかばう者も、彼を理解してくれる者も存在しない。少年はいつか戦争が終わるまで、いや終わったとしても、この窮状が変わる兆しすら見えないままに、いつまでも続いて行くように思えてならなかった。あの少女との出会いこそが、彼にもたらされた最初で最後の奇跡、唯一の救いの時であったのかもしれない。だが、それを逸しそれを無に帰してしまったのは、他ならぬ彼自身の手によるものなのであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4954z/>

---

失われた少女

2011年12月16日21時46分発行